

国指定史跡

大分元町石仏

－保存修理事業に伴う発掘調査概要報告書－



1995

大分市教育委員会

例 言

1. 本書は、大分市教育委員会が国、県費の補助を得て実施した、国指定史跡大分元町石仏保存修理事業に伴う発掘調査の概要報告書である。

2. 調査組織は、次のとおりである。

調 査 主 体	大分市教育委員会
調査責任者	大分市教育委員会 教育長 清 瀬 和 弘
事 務 局	内 田 司（大分市教育委員会事務局次長兼文化振興課長）
	秦 政 博（同上文化振興課参事）
	堀 和 則（文化振興課文化財室長）
	佐 藤 良 蔵（同上文化財室主査）
	徳 丸 ひとみ（同上文化財室主事）
調 査 員	巖 岐 和 夫（文化振興課文化財室専門員）
調査作業員	堤 秀 夫・堤 里 子・岡 崎 哲 雄・岡 崎 サキエ
	岡 崎 日出夫・橋 本 満・橋 本 登志子・古 長 咲 子
	古 武 稔・甲 斐 辰 夫

3. 遺構の実測、写真撮影と遺物の実測及び製図は巖岐が実施した。

4. 参道調査区で出土した陶磁器類については、太宰府市教育委員会 山本信夫氏から多大な御教示を得る。
また大分市教育委員会塩田潤一にも協力を得た。

5. 本文の執筆と編集は巖岐が行った。

6. 大分元町石仏保存修理事業指導者会

沢 田 正 昭（奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長）
中 村 康（京都国立博物館・京都文化資料研究センター・文化財保存修理管理指導室長）
山 本 豊 聡（九州産業大学工学部教授）
佐 治 泰 次（九州大学名誉教授）
佐 藤 真 一（大分市文化財調査委員長）

大分元町石仏保存修理事業中には、文化庁保護部記念物課文化財調査官本中真氏の指導、助言をいただいた。

目 次

I. 調査の経過	1
II. 遺跡の立地と環境	1
III. 調査の概要	4
IV. おわりに	13

は じ め に

豊かな自然と温暖な気候に恵まれた県都大分市は、古来より「豊の国」の中核として、また東九州の玄関口として多くの文物の中継基地的な役割を担ってまいりました。こうした大分の姿は国指定史跡大分元町石仏を始めとする歴史的遺産によりうかがい知ることができます。

大分元町石仏は昭和61年度から保存修理事業をおこなってきたところですが、本書はこの整備事業の一環として平成6年度に実施いたしました発掘調査の概要を収録したものです。

大分元町石仏のある上野丘陵東端の地は、平安時代の終わりに宇佐八幡文書である「宇佐大鏡」に荏隈郷勝津留畠と称されるなど多彩な歴史事象が展開したところでもあります。

今回の発掘調査では神秘的なベールに包まれた大分元町石仏の造立年代推定の手掛かりをはじめとして古墳時代以降、中世にかけての数々の貴重な成果を得ることができました。

これらの資料は今後の保存・整備対策に役立ててまいりたいと存じます。

本事業が、文化庁をはじめ、大分元町石仏指導者会の指導のもとに本市の文化財保護行政の核となり、先進的な成果を収めるとともに、保護気運の高揚につながることを確信いたしております。

調査の実施に際しまして、ご指導・ご助言を賜りました関係各位に、心より深く感謝申し上げます。

平成7年3月

大分市教育委員会

教 育 長 清 瀬 和 弘

フリガナ	オオイタ モトマチ セキブツ
書名	大分元町石仏
副書名	保存修理事業に伴う発掘調査概要報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著機関	讃岐和夫
編集機関	大分県大分市教育委員会
所在地	大分県大分市荷揚町2-31(〒870)
発行年月日	西暦1995年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オオイタモトマチ 大分元町 セキブツ 石仏	オオイタケンオオイタシ 大分県大分市 オオアザキオオアザキ 大字大分字 セキブツ 元町4609番地 他3筆	大分市	322014	33° 13′ 3″	131° 37′ 10″	1994.11.28 1994.12.22	34㎡	大分元町 石仏の保 存修理事 業に伴う 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大分元町石仏	石仏	古墳 奈良 平安 中世 近・現代	旧地形確認 池跡	土師器壺、甕 須恵器坏、高杯 土師坏、埴 土師蓋 陶磁器 白磁青磁 緑釉陶器 等	国指定史跡

I. 調査の経過

大分市では、昭和61年度から大分元町石仏の保存修理事業を実施してきたところであり、ボーリング調査、理化学試験、地下水位観測温度・湿度測定の実行が行われ、石仏の石質剥落の主な原因が地下水であることが判明したため、石仏を乾燥化させるために地下水低下工法を採用し、石仏背後の排水トンネル工法、石仏前面からの集水井と集水ボーリング工法を行い、地下水の排除に成果を得た。

平成3年度において樹脂含浸による石仏面の硬化、平成4年度では亀裂部の補強、説明板設置。平成5年度では石仏に白色の折出物の発生機構と対策方法、地下水等の分析についての保存調査、石仏の写真測量を実施。今年度の事業については熱映像撮影業務、応急的な石仏の樹脂含浸作業、および石仏の保護保存に向けた環境条件の整備として覆屋の改修に伴う発掘調査を実施した。今回の発掘調査区は、薬師堂の北東側、三尊仏坐像の前面調査区、薬師堂の南西側調査区、薬師堂正面の参道部（南東）の調査区、薬師堂南側の調査区を設定して発掘調査を実施してきた。

調査については、平成6年11月28日より薬師堂北東側から調査を始める。11月30日 北東調査区の断面土層実測と平板実測、薬師堂南西側奥に1×2mの調査区掘り下げる。12月1日 薬師堂正面の参道部調査区2×2.4mを掘り下げる。北東調査区は池跡と思われる遺構を確認。南西調査区土層断面実測。12月2日 参道調査区掘り下げ、北東調査区の埋めもどし作業始める。南西調査区埋めもどし完了。12月12日 薬師堂の南側調査区2ヶ所設定、実測および写真撮影完了後、埋めもどしを行う。12月16日 参道調査区掘り下げ、表土層より約2.7mほどで床面（砂質層）を検出。12月22日 参道調査区を埋めもどしをもって調査を完了する。発掘調査日数は実動17日間にかけて実施した。



元町石仏全景 東より

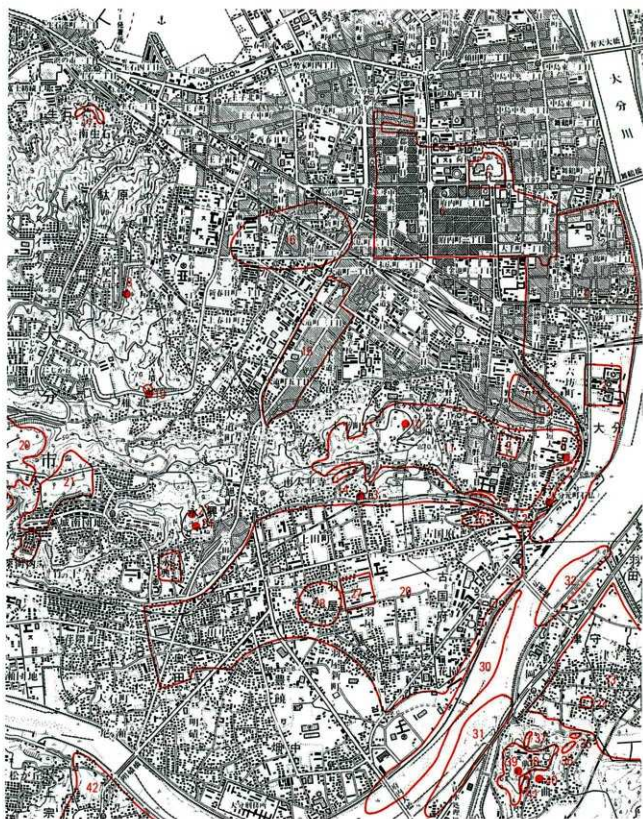
II. 遺跡の立地と環境

大分元町石仏は、市街地中心部より南へ約2.2kmほどの場所に、上野丘陵の東端部崖面に造像されている。肥沃な沖積平野を形成された大分川河口の左岸にあたり、大分川が上野丘陵に迫ってくる。標高約11mの大分市大字大分元町4609番地他3筆に所在している。元町石仏周辺部は、まだ農業地域として残っており、まわりの急速な宅地化の開発に対して大変貴重な地域である。

この元町石仏は、昭和9年3月に国指定史跡となり、重要な文化財として保護保存されている。石仏群の中でも像高307cmの薬師如来坐像が肉厚に彫り出されて、覆屋の中央にどっかりと鎮座している。この両脇に毘沙門天、不動明王、杢羅童子、制吒迦童子が彫られているがほとんどが欠落している。

また薬師堂外の右側にも古式の舟形背光を刻んでいる三尊仏坐像が彫られていたが、すでに崖面は欠落しており、すっかり朽ちている。この石仏は堂内の石仏よりも彫られた時期が古いと思われる。この石仏より少し離れた里道下に小さな庵の中に三尊仏と下に五基の五輪塔が浮彫りされたものもある。元町石仏の造像された時期は、古式の三尊仏を中心に11世紀後半～12世紀後半のものと考えられる。

また、この地域は古代から中世までの宝庫であり、多くの遺跡が所在しており、縄文時代では、大分川河川敷1・2・3遺跡から後・晩期の土器が多く散布しており、この地域は、早くから開けた場所であることが窺える。弥生時代では、大分平野の低地・微高地や台地・丘陵上を選んで遺跡が営まれており、とくに低地上の遺跡では、古国府遺跡群と環溝集落を形成し弥生後期の土器が多量に出土し、また青銅製ヤリガンナや泥炭層より農耕具の木製品が出土させた下郡遺跡や羽田遺跡等が標高5～10m前後に位置している。台地上の遺跡では、標高63mの守岡遺跡があり、中期と後期の集落跡や銅鏡片2面が出土している。



- | | | | | |
|-------------|-------------|---------------|---------------|-------------|
| 1. 元町石仏 | 11. 上野遺跡群 | 21. 城南遺跡 | 31. 大分川河原敷2遺跡 | 41. 曲平橋穴墓群 |
| 2. 岩屋寺石仏 | 12. 岩屋寺横穴墓群 | 22. 尼ヶ城遺跡 | 32. 大分川河原敷3遺跡 | 42. 玉沢地区条里跡 |
| 3. 持山万寿寺跡 | 13. 伽藍石仏 | 23. 千人塚 | 33. 津守遺跡 | |
| 4. 中世大友城下町跡 | 14. 南太寺横穴墓群 | 24. 弘法穴古墳 | 34. 松平忠直津守館遺跡 | |
| 5. 府内城跡 | 15. 大道条里跡 | 25. 永興遺跡 | 35. 鳥越伽藍石仏 | |
| 6. 府内城・城下町 | 16. 東田室遺跡 | 26. 岩屋寺遺跡 | 36. 曲迫横穴墓群 | |
| 7. 若宮八幡宮遺跡 | 17. 生石横穴墓群 | 27. 金剛宝成寺跡 | 37. 滝尾守岡横穴墓群 | |
| 8. 大臣塚古墳 | 18. 亀甲山古墳 | 28. 羽屋園遺跡 | 38. 守岡遺跡 | |
| 9. 上野大友館跡 | 19. 古宮古墳 | 29. 古国府遺跡群 | 39. 守岡古墳 | |
| 10. 飯盛塚古墳 | 20. 庄ノ原遺跡 | 30. 大分川河原敷1遺跡 | 40. 曲石仏 | |

第1図 元町石仏の位置と周辺遺跡 (1/25,000)

また、上野遺跡群については、標高72mに位置しており、中期後半から後期初頭にかけての集落跡と県内初例となった隅丸方形周溝遺構（10×7m）があり、小形鉢・甕・壺・丹塗り長頸壺等が多く出土しており注目された。とくに下郡遺跡のように、大陸系磨製石器や木製農耕具の出土遺物により、弥生時代前期中頃にはすでに水稲農業を実施したことが裏付けられる。

古墳時代では、元町石仏の東側、上野丘陵先端部に前方後円墳がある。すでに前方部は失っており、現存する後円墳は約40m前後を測る。前方部のくびれ部は失っており、主体部は組合箱式石棺で棺内からは人骨、短甲、刀等が出土したと伝えられている。また百合若大臣の伝説にまつわる古墳である。古墳築造年代は4世紀後半～5世紀に比定されると思われる。

古代・中世では、古代の「国の華」である豊後国分寺と政治の中心となる豊後国府がある。とくに古国府地域には、条里の地割遺構が残っており、国府推定地として周知された場所である。この地域は、昭和51年度からの宅地開発に伴う調査では、中世の遺構、遺物を検出をしているが、国府に関連する遺構と遺物の手掛りについては、まだ確認されていない。ところが、上野丘陵には「高国府」という地名が平安時代後期の史料に見られることから、注目される場所である。丘陵上の金剛宝戒寺周辺からは、古代の7世紀～8世紀初頭に比定できる、単弁蓮花文の百済系軒丸瓦が散布しており、古代寺院等の存在が推定されているが、本格的調査は平成3年度の上野遺跡と平成6年度上野岩屋寺遺跡がある。上野岩屋寺遺跡では、9世紀前半～16世紀前半にかけての遺構・遺物を検出している。この地点は平安時代の文献に現われる「高坂横道」の推定地である。また、9世紀代の遺物としては越州窯系青磁碗・緑釉陶器や墨書土器も出土しており、大変注目される場所になろう。この上野岩屋寺遺跡の南崖面に岩屋寺石仏が彫られている。この石仏は17軀が、ほとんど破損しているが、中でも若干残りの良い十一面観音立像が顔面を欠落した状態でみられている。元町石仏とは崖に沿っており、約100mほど北東部に石仏が所在している。

元町石仏の北西側、約500mほどの丘陵上に豊後守護職を務めた大友氏の大友館跡が造られており、土塁と空堀からなる城郭的な形態をもち、内郭は、東西80m、南北100mほどの大きさの中世居館が所在している。また、戦国時代府内絵図をみると、丘陵の北側低地に府内町並が形成され、この中に大友屋敷があらたに造られており、約250年間余りの間、存続したことが窺える。

以上のように、大分元町石仏とその周辺部は、古代から中世にかけて政治・経済・文化の中心地であったことが窺える。



元町石仏周辺状況（空中）

Ⅲ. 調査の概要

今年度の調査は、石仏保護保存のための整備の一環として、薬師堂覆屋の改修に伴うもので、薬師堂の北東、南西、および参道部と南側について調査範囲の狭い条件の中で、約34㎡を実施してきたところである。

1. 薬師堂の北東調査区

この調査区は、薬師堂に向かって外側右の崖に古式舟型光背をもつ三尊仏坐像が彫られているこの前面部を掘り下げた。この場所には、水が溜る窪みがあり、古くからこの溜り水が眼病に効くと大切に使用されてきたが、現在では、水が涸れている。

また、地元の古老に聴くと、三尊仏の前面には池が掘られていたが、昭和初期に池を埋め、平坦面にすることがわかった。

調査は、中央の敷石を中心に2ヶ所に北東-1Tと北東-2Tに設定して掘り下げを実施する。

北東-1Tは、薬師堂側のトレンチである。後世の擾乱があり、特に暗渠のための掘り方があり、クラッシャーランがつめられていた。また、北東-2Tの土層観察では、表土層から地山まで650mmを測り、最下層では黒褐色の泥炭層粘質土であり、木葉等が堆積しているおり、水溜り（池）であったことが窺える。その上層については、自然堆積層の砂質層と昭和初期の埋めもどしの土層であった。この池跡の形状は、地形に合わせて掘られており歪な長方形を呈しており、大きさは $5 \times 3.5\text{m}$ （17.5㎡）、深さ45cmを測る。

遺物は、近・現代の陶磁器や薬師堂に覆われていた瓦、火鉢、スリ鉢や古瓦（平安）片や古墳時代の遺物が若干ローリングを受けて出土しているが、この池が造られた時期は不明である。

2. 薬師堂南西調査区および南調査区

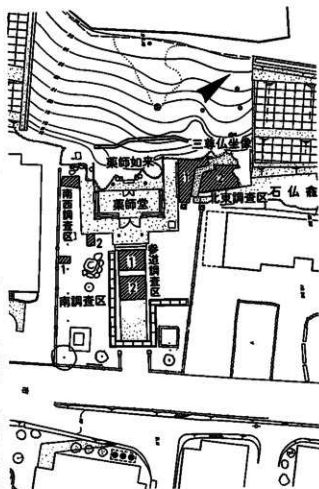
南西調査区は、薬師堂の左側の奥壁部分にあたる場所に、 $2 \times 1.2\text{m}$ （2.4㎡）のトレンチを設定して掘り下げを実施する。

地山の状況は、北東で20cmと浅く検出される。南西では、自然の落込みを確認する。この落込みに20～30cm前後の隙が人為的に埋めており、おそらく整地をするための事業と考える。また、中央部には北西から南東にかけて幅40cmの暗渠が造られていた。

南調査区は、地山確認のために南-1Tと南-2Tの2ヶ所を設定して掘り下げを実施する。1Tは $1.1 \times 0.6\text{m}$ （0.66㎡）で深さ約1.1mを掘る。2Tでは $1.1 \times 0.8\text{m}$ （0.88㎡）で深さ約1mを掘るが、両方共に地山は確認していない。土層観察では、整地層がみられる、下位層は、参道調査区（南西）と同様な層位をみる。遺物は暗茶褐色や灰黒色泥炭層等から若干出土させている。

3. 参道調査区

この調査区は、薬師堂正面の参道部である調査区は第1T、第2Tの2ヶ所に設定して約10㎡について実施した。



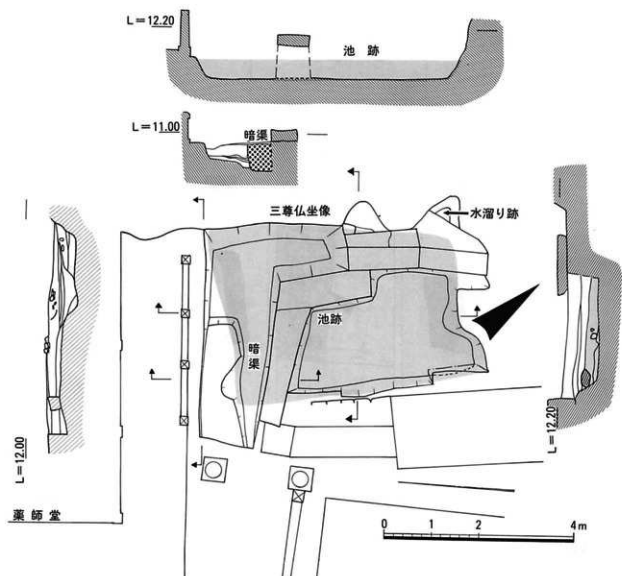
第2図 元町石仏調査区位置図 (1/400)



北東調査区穴堀状況（東より）

トレンチは、約2.8mほどの深さに掘り下げ、多くの貴重な遺物を検出することができた。また、土層断面の観察を注意して見ると、トレンチの南西側に道路のふちを作っている側溝が北西から南東の方向に造られているのを確認、その内側（北東）は、黒褐色と茶褐色の粘質土と褐色の非常に硬い6層からなる整地状に60cmほど堆積しており、この遺構は旧参道部と思われ、東向の薬師如来坐像に対して正面に造られている。標高レベルが10.3m～9m間には茶褐色土層と黒褐色土層をベースに礫が多く混入したもので、人為的なものと思われる。この層から9

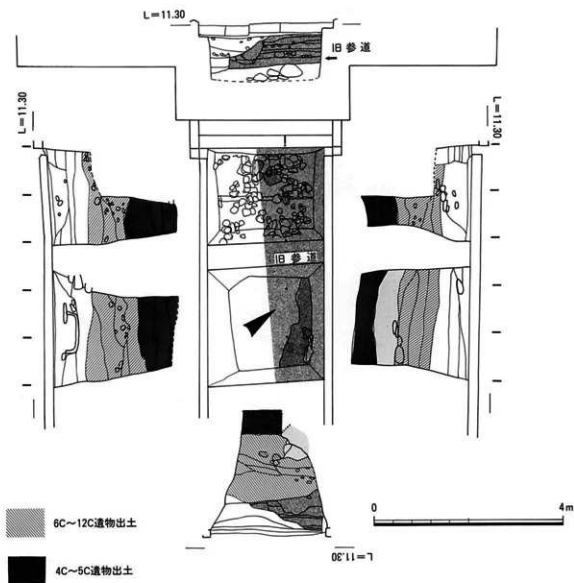
世紀～11世紀頃にかけての土師坏、蓋、甕、陶磁器類、須恵器の円面硯脚部や瓦等の遺物を検出。また標高レベル9～8.3mの間に自然堆積状の水分の強い黒色泥炭層と砂地（床面）の層があり、この層内に4世紀代に比定できる、壺、複合口縁壺、高坏、小形丸底壺、甕形土器等の古墳時代の遺物を検出している。



第3図 薬師堂北東調査区平面断面図（1/80）



▲参道調査区第2丁状況（北より）



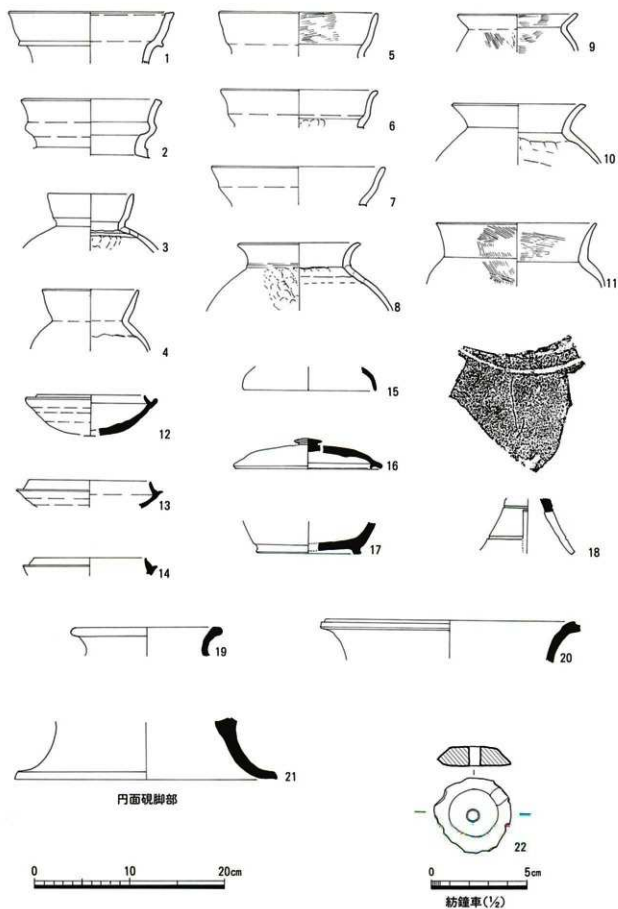
第4図 薬師堂参道調査区平面断面実測図（1/80）

表1 遺物一覧表

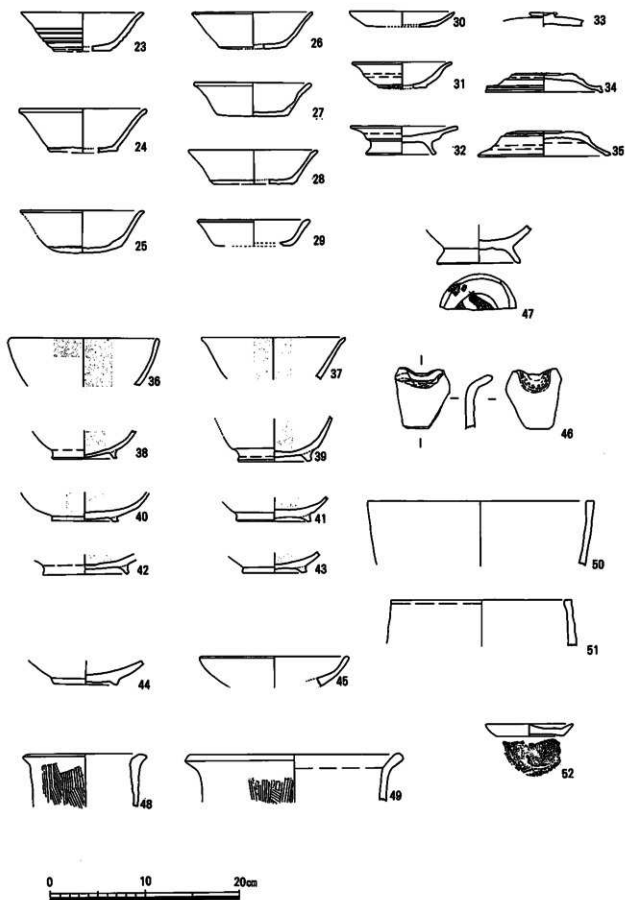
遺物 番号	所蔵 番号	出土 状況	器種	土質	色	面	裏面	口縁	高さ	口径	底径	備 考
1	5	2T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	17.4			複合口縁直形。口縁は内湾しながら外 方に開く。縁を有す
2	5	2T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	(14.8)			複合口縁。口縁のつなぎめは指ナデで内 湾して立ちあがり外反する。縁を有す
3	5	1T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	(9)			複合口縁直形。口縁先端部は尖がり 気味
4	5	2T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	(10)			丸底蓋。頸部は張らない。縁を有す
5	5	2T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	(17)			複合口縁。口縁は立ちあがり若干ひ ねりをくわえている。縁を有す
6	5	2T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	(16)			複合口縁。口縁は若干ひねりをくわえ、 立ちあがり外反する。縁を有す
7	5	2T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ナデ	ヨコナデ	(18)			複合口縁。口縁は立ちあがり若干ひ ねりをくわえている。縁を有す
8	5	1T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	(13)			口縁部はく字に外反、頸部に突寄風 に成形のときについた縁が残る
9	5	2T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	12.6			口縁部はく字に外反し、若干内湾気味 になる
10	5	2T	壺	砂粒	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	(14)			口縁部はく字に外反する
11	5	2T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	(16.8)			口縁部は直線的に立ちあがり、口縁は 尖がり気味である。外面カーボン付着
12	5	2T	壺	白色粒	灰色	灰色	ヨコナデ	ナデ	14	(4.2)		須恵器坏身
13	5	2T	壺	白色粒	灰色	灰色	ヨコナデ	ナデ	(13)			須恵器坏身
14	5	2T	壺	白色粒	灰色	灰色	ヨコナデ	ナデ	(11.8)			須恵器坏身
15	5	2T	壺	白色	灰色	灰色	ヨコナデ	ナデ	(14)			須恵器坏蓋
16	5	1T	壺	石瓦	灰色	灰色	ヨコナデ	ナデ	(16.8)	(9.4)		須恵器のつまみをもつ坏蓋、かえりは 内側になる。つまみ径3cm
17	5	2T	壺	精製	黒色	灰色	ヨコナデ	ナデ			(10)	須恵器高台付の坏
18	5	2T	壺	精製	灰黒色	灰黒色	ナデ	ナデ				須恵器高台付部。通しをもち、細い波 状文を施している
19	5	1T	壺	精製	黒灰色	黒灰色	ヨコナデ	ナデ	(16)			須恵器大口蓋。口縁先端が玉縁状にな る
20	5	2T	壺	黒色粒	灰色	灰色	ヨコナデ	ナデ	(26)			須恵器大口縁部
21	5	2T	壺	精製 白色粒	灰黒色	灰黒色	ヨコナデ	ナデ			(27.5)	須恵器円面状脚部
22	5	1T	壺	石製		灰黒色						滑石製紡錘車。直径4cm、厚さ1cm、若 干縁が欠けている。孔径0.5cm
23	6	1T	壺	金銀母 精製	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	(13)	4.2		土師器環。口縁部は開きながら直線的 である
24	6	1T	壺	精製	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ	ナデ	(12.4)	(4.6)		土師器環。体部は直線的で口縁部は外反 し、先端は丸をもつ
25	6	2T	壺	角四石 瓦片	黄色	黄色	ヨコナデ	ナデ	(15)	4.4		土師器環。口縁部は外反しながら開く。 底部は若干丸をもつ
26	6	2T	壺	角四石 瓦片	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ	ナデ	(12.8)	3.9		土師器環。体部は直線的で口縁部は外反 気味
27	6	2T	壺	角四石 瓦片	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ	ナデ	(12.6)	3.5		土師器環。口縁部は外反しながら開く。 先端は丸をもつ
28	6	1T	壺	角四石 瓦片	淡灰色	黒色点	ヨコナデ	ナデ	(13.8)	3.6		土師器環。口縁部は外反しながら開く
29	6	2T	壺	角四石	黄色	黄色	ヨコナデ	ナデ	(12)			土師器環。口縁部は内湾気味に短く外 反し、先端は丸をもつ
30	6	2T	壺	精製	赤褐色	赤褐色			(11)	(1.5)		土師器小皿。口縁部は直線的に短く外 反し、先端は尖る
31	6	2T	皿	角四石	黒茶褐色	黒茶褐色	ナデ	ナデ	(18.6)	2.8		土師器小皿。体部は内湾気味に立ち上 がり、口縁部は外反する
32	6	1T	皿	角四石 瓦片	黄色	黄色	ヨコナデ	ナデ	11.5	3	7.4	土師器脚付皿。茶托形土器
33	6	2T	壺	角四石 瓦片	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ	ナデ				土師器蓋のつまみ部
34	6	1T	壺	角四石 瓦片	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ	ナデ	(12.2)	1.9		土師器蓋口縁部が屈曲する
35	6	2T	壺	角四石 瓦片	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	14	2.5		土師器蓋。天井部はへら切り、口縁部 先端の接合部面は平坦にしている

表2 遺物一覧表

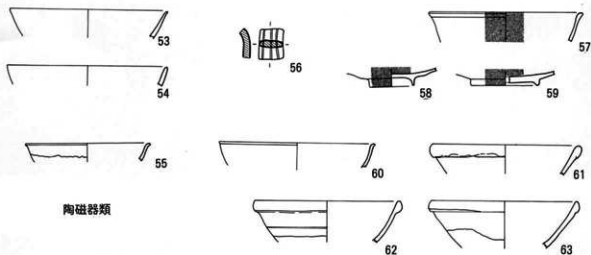
遺物 番号	所収 番号	出土 位置	器種	素材	形状	色調	内面	外面	器面装飾	注記 (cm)	備考
36	6	2T	甕	精製	黒色	黒色	黒色	茶褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ (16)	黒色土器。口縁部、体部は内湾気味に立ち上がり、先端は若干丸味をもつ
37	6	2T	甕	精製	黒色	黒色	黒色	茶褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ (15.4)	黒色土器。口縁部、体部は反外し先端は尖がる
38	6	2T	甕	砂粒	黒色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	ヘラ磨き	ヨコナデ ヘラケズリ	黒色土器。口縁部、体部は反外し先端は尖がる
39	6	2T	甕	角閃石	微粒	黒色	暗茶褐色	暗茶褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	黒色土器。口縁部、体部は反外し先端は尖がる
40	6	1T	甕	精製	微粒	黒色	黒色	黒色	ヘラ磨き	ヨコナデ	黒色土器。口縁部、体部は反外し先端は尖がる
41	6	2T	甕	角閃石 白色粒子	微粒	黒色	暗茶褐色	暗茶褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	黒色土器。口縁部、体部は反外し先端は尖がる
42	6	1T	甕	金銅 白色粒子	微粒	黒色	黄褐色	黄褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	黒色土器。口縁部、体部は反外し先端は尖がる
43	6	2T	甕	精製	細粒	黒色	淡黄色	淡黄色	ヘラ磨き	ヨコナデ	黒色土器。口縁部、体部は反外し先端は尖がる
44	6	1T	甕	精製	微粒	灰白色	灰白色	灰白色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
45	6	1T	甕	茶色 白色粒子	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ (16)	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
46	6	1T	甕	精製	微粒	赤褐色	赤褐色	赤褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
47	6	2T	水注	角閃石 白色粒子	微粒	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
48	6	2T	甕	角閃石 白色粒子	微粒	黒褐色	黒褐色	黒褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
49	6	2T	甕	角閃石	微粒	黄褐色	黒色	黒色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
50	6	2T	甕	角閃石 白色粒子	微粒	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
51	6	2T	甕	角閃石 白色粒子	微粒	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
52	6	2T	甕	精製	微粒	黄色	黄色	黄色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
53	7	2T	甕	精製	微粒	淡青緑色	淡青緑色	淡青緑色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
54	7	2T	甕	精製	微粒	青緑色	青緑色	青緑色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
55	7	2T	甕	精製	微粒	灰白色	灰白色	灰白色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
56	7	2T	水注	精製	微粒	黄茶色	黄茶色	黄茶色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
57	7	2T	甕	精製	微粒	淡緑色	淡緑色	淡緑色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
58	7	2T	甕	精製	微粒	緑色	緑色	緑色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
59	7	2T	甕	精製	微粒	淡緑色	淡緑色	淡緑色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
60	7	2T	甕	精製	微粒	淡白色	淡白色	淡白色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
61	7	1T	甕	精製	微粒	乳白色	乳白色	乳白色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
62	7	1T	甕	精製	微粒	乳白色	乳白色	乳白色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
63	7	1T	甕	精製	微粒	乳白色	乳白色	乳白色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
64	7	1T	甕	精製	微粒	乳白色	乳白色	乳白色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
65	7	2T	甕	精製	微粒	灰黒色	灰黒色	灰黒色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
66	7	1T	甕	精製	微粒	灰白色	灰白色	灰白色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
67	7	2T	甕	精製	微粒	赤褐色	赤褐色	赤褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
68	7	2T	甕	精製	微粒	黒褐色	黒褐色	黒褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様
69	7	1T	甕	精製	微粒	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	ヘラ磨き	ヨコナデ	土師器。口縁部は若干丸味をもつ。この土器は下郡追跡J区SE03と同様



第5圖 參道調査区遺物実測図 (1/4)

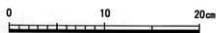
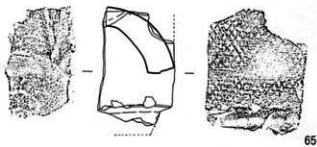
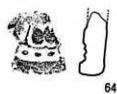


第6图 参道調査区遺物実測図 (1/4)



陶磁器類

瓦



第7図 参道調査区遺物実測図 (1/4)



越州窯・長沙窯・灰釉、白磁碗



緑釉陶器



白磁（玉縁）碗



須恵器内面硯脚・高坏脚



平瓦・玉縁丸瓦

IV おわりに

今回は、調査の概要であり、調査の確認ができた事項のみにについてまとめた。

堂外三尊仏坐像前面の調査区は、時期の不明な池跡(21㎡)が検出されたが、昭和初期に池を埋め整地をおこなっており、近・現代の遺物が埋め込まれていた。次の薬師堂の参道調査区では、地表面から最下面の砂地床面までは約280cmと深く掘り下げる。上位面で、旧参道の遺構を確認する。地表面から約60cmの間に、土層が10cm単位で版築状に層位を成している。旧参道は現参道より約5度東に振っており、薬師如来の正面でN-63°-Wに主軸を向けている。また、側溝の施設があった。その下位の層から、8世紀から10世紀のもの、12世紀から13世紀にかけての遺物を検出している。さらに、その下位の泥炭層からは、古墳時代の4世紀後半から6世紀後半にかけての遺物を検出している。しかし、遺構については不明であった。まず、4世紀後半から5世紀前半(1~11・22)の遺物については、大分川河口一帯を支配していた大臣塚古墳の時期である。6世紀後半から7世紀初頭(12~15・18)の遺物は若干であるが検出しており、比定される遺構は、対岸の下郡遺跡^{註1}に所在している。

また、元町石仏で注目される遺物としては、輸入陶磁器である。陶磁器には2時期の区分ができる。8世紀後半から10世紀中頃(53~59)の太宰府陶磁器出土傾向のA期と12世紀中頃から後半(60~63)のD期からなる。^{註2} まず、A期では、精整品である越州窯系青磁碗(53、54)、長沙窯系青磁と思われる水注の把手(56)、緑釉陶器(57~59)、灰釉陶器(55)である。D期では、白磁碗(60)、白磁(玉緑)碗(61~63)がみられる。とくに、九州におけるA期の陶磁器の傾向は、長沙窯、越州窯、緑釉、灰釉のセットの内いずれかが欠落しており、このセットが整うのは、北部九州だけであるため、注目すべき資料である^{註3}。また、複式素弁蓮花文の軒丸瓦^{註4}(64)と玉緑付丸瓦(65)、丸瓦(66)、平瓦(67~69)の格子目叩きであり、10世紀代に比定できる。この瓦で屋根を葺くには、絶対量が足りないが、建物等の可能性について否定できない。また、8世紀から10世紀後半にかけての遺跡のあり方としては、輸入陶磁器類をもち、瓦類や多量に検出している土師器の日常生活器類、また、円面硯の脚^{註5}(21)等の資料をみても、国府に関連する遺物として位置付けられると考えており、このことは元町石仏とその周辺については、非常に重要視される地域であることには間違いないと考える。

以上の様に、元町石仏の調査区は限定された範囲内であるにもかかわらず、多くの好資料を得ることができた。しかし、遺跡とまわりの状況については、多くの検討課題を残したといえる。

今後は、遺跡の性格を知るための確認調査が必要であろう。なお、時間的な問題で遺物の整理等が十分でなく、また、概報のため、すべてが紹介できなかったが、今後の報告作成にゆずりたい。

註1、「下郡遺跡群」大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概要(1)1990大分市教育委員会。

註2、山本信夫「貿易陶磁研究No10」1990 日本貿易陶磁研究会。

註3、山本信夫氏御教示による。

註4、豊後国分寺跡出土の軒丸瓦第V類と比定できる。

註5、大分市内では、円面硯出土地点は、下郡遺跡と地藏原遺跡のみである。



参道調査風景



文化財愛護シンボルマーク

ひろげた両手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ますぐみ）のイメージを表し、これを三つ重ねることによって、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

（昭和41年5月26日決定）

大分元町石仏

発掘調査概報

平成7年3月31日

発行 大分市教育委員会

印刷 御中央印刷